

ねねね、ネオニコチノイドってなあに？

新農薬ネオニコチノイドについて“未来に向けたみんなの意見”づくり大公開

報告書

主催；

一般社団法人 act beyond trust

国際環境 NGO A SEED JAPAN

認定 NPO 法人まちぼっと

目次

| | |
|--|-----------|
| I. 企画趣旨と概要 | 3 |
| 企画趣旨..... | 3 |
| 企画概要..... | 4 |
| II. 各回の内容 | 7 |
| 第1回「ミツバチからのメッセージ」..... | 7 |
| 藤原誠太さんのお話し..... | 8 |
| 後藤和明さんのお話し..... | 8 |
| 参加者の主な感想..... | 9 |
| 第2回「子どもを守るための予防原則」..... | 10 |
| 大竹千代子さんのお話し..... | 11 |
| 黒田洋一郎さんのお話し..... | 12 |
| 参加者の主な感想..... | 14 |
| 第3回「ネオニコ問題をナナメに切る」..... | 14 |
| 鈴木菜央さんのお話し..... | 15 |
| 高安和夫さんのお話し..... | 17 |
| 参加者の主な感想..... | 18 |
| 第4回 フォーラム「ねねね、ネオニコチノイドってなあに？」 ～「美味しんぼ」105巻を読んで、みんなで語ろう！～..... | 19 |
| 田中優さんのお話し..... | 19 |
| 雁屋哲さんのお話し..... | 21 |
| 3人の子育てママさんの発表..... | 22 |
| 参加者の主な感想..... | 25 |
| 追加企画 ワークショップ「マイ・プロジェクトをカタチにしよう」..... | 25 |
| III. 成果と分析 | 26 |
| 各回の成果と分析..... | 26 |
| 全体を通じた成果と分析..... | 28 |
| 終わりに..... | 29 |

I. 企画趣旨と概要

連続企画「ねねね、ネオニコチノイドってなあに？ －新農薬ネオニコチノイドについて“未来に向けたみんなの意見”づくり大公開－」は、以下の役割分担のもと3団体の共催で行われた。

- 一般社団法人 act beyond trust ; 資金提供、企画・実施上のアドバイス
- 国際環境 NGO A SEED JAPAN ; 若年層に向けた広報、企画協力
- 認定 NPO 法人まちぽっと ; 企画運営、報告書作成、事務局

企画は、2012年3月から6月まで4回行われ、その後の追加企画として8月にワークショップを開催した。これらの内容は、3団体に加えてファシリテーターの青木将幸氏が協働で作成した。

■ 企画趣旨

共催団体で作成した企画書は、以下の通り。

今の日本社会では震災復興と原子力発電所事故という、大きな問題に関心が集中している。このことは当然であるが、しかし10年、20年後の社会を考えると、それだけではない諸問題を丁寧にすくい上げていく作業も必要だと考えられる。

この企画では、狙い定めた昆虫に対する神経毒として作用し、人体や環境への影響が少ないというふれこみで、日本でもこの10年で使用量が3倍に急増しているネオニコチノイド系の新農薬の問題を取り上げる。長年、弊害が指摘された有機リン系農薬に替わって登場したものの、ミツバチの大量死をはじめ生物多様性と人間への悪影響が報告され、皮肉にも健康志向の減農薬農産物や緑茶の愛用がリスクになっている等の問題提起は、まだ一般にほとんど知られていない。

一方で、特に果物やお米の生産者には、ある程度の農薬の使用をしなければ生活ができないという現実がある。心ある農家や流通業の皆さんが減農薬の努力を進めているが、日本の農業を守るという点から見て、まったくの不使用という選択には無理があるという声も、現場の意見として重く考えなければならない。

ネオニコチノイドの問題点の一つは、新しい農薬であるために、その影響の程度がまだ明確ではないということである。しかし、問題を先延ばしにすることで、明確になったときには遅

すぎたということは、原子力発電所の事故の例を見ても、私たち市民の責任として避けなければならない。

この連続企画では、ネオニコチノイドの問題について多くの人に知ってもらうこととともに、私たち普通の市民はどのように考えていくべきなのか、そして未来に向けてどのような対応をすべきなのか、「アドボカシーカフェ※」で多面的な視点から考え議論をしていく。

企画を単なる勉強会にするのではなく、社会的な広がりを持ったものにすることで、自分たちの未来を自分たちで選択していく、これからの一つの行動指針をつくり上げたいと思っている。

※アドボカシーカフェ

認定 NPO まちぽっとのプロジェクトである「ソーシャル・ジャスティス基金(SJF)」が始めた、政策提言などについての市民意見を形成することを目的としたカフェ。今回はこの形式を使ってネオニコチノイドに対する一つの市民意見の形成を行い、社会提案につなげていくことを目的としている。

■ 企画概要

○概要

*企画目的

- ・ 「ネオニコチノイド」という社会一般には広く知られていない問題を、専門家ではなく普通の市民に広げることを目的に行われた。また、結果として最終回後には何らかの「市民意見」の形成が行われることを目指した。

*企画の前提と手法

- ・ 企画は、ネオニコチノイドに対して「反対ありき」を前提とするのではなく、現状と事実を知った上で、参加者が自分自身の意見を持てるように進行することとした。そのため、アドボカシーカフェという手法を導入し、来場の一般参加者が登壇者の発表を聞いたうえで議論を深め、それを共有する場を重視した。

*登壇者の人選と進行方法

- ・ 広く一般に広げる仕掛けとして、ネオニコチノイドを大きく取り上げた人気マンガ『美味しんぼ 105 巻』を下敷きに、そこに登場する専門家を毎回お呼びし、最終回に原作者をお

迎えした。また、それらの専門家に加えて「もう一つの視点」を持つゲストを各回でお迎えし、重層的な意見交換ができるような形式で進行した。

- 普通の市民の感覚を基本とするため、ネオニコチノイドについて大きな関心を持っていない「子育てママ」代表として、土井彩氏、野下晃子氏、レイ彩氏の3名に有償で参加を依頼した。この3名の参加者には全4回すべての企画に参加していただき、運営側が一切の意見誘導をしない状態で理解を深めてもらった。そして最終回である第4回では、全4回に参加した普通の市民代表としてこの問題をどう捉え、どう考えたか発表をしていただいた。
- 企画全体の連続性と議論の質を保つことを目的に、青木将幸氏に第1回～第4回のファシリテーターを依頼した。

*ホームページと facebook の活用

- 企画を参加者だけで終わらせないようにするため、企画を同時進行で反映していくホームページと、意見を集約するための facebook を意識的に活用した。

HP <http://neo.socialjustice.jp/>

Facebook <http://www.facebook.com/thinkneonico>

*全4回と追加企画の概要

- 第1回「ミツバチからのメッセージ」
日 時：3月17日（土） 13：30～17：30
登壇者：藤原誠太氏（養蜂家、ネオニコチノイド系農薬の使用中止を求めるNGO
ネットワーク代表）
後藤和明氏（らでいっしゅぼーや株式会社・Radixの会）
- 第2回「子どもを守るための予防原則」
日 時：4月28日（土） 14：00～18：00
登壇者：大竹千代子氏（化学物質と予防原則の会代表）
黒田洋一郎氏（元東京都神経科学総合研究所）
- 第3回「ネオニコ問題をナナメに切る」
日 時：5月12日（土） 14：00～18：00
登壇者：鈴木菜央氏（greenz.jp 発行人）

ねねね、ネオニコチノイドってなあに？

—新農薬ネオニコチノイドについて“未来に向けたみんなの意見”づくり大公開—

高安和夫氏（銀座ミツバチプロジェクト理事長）

- ・ 第4回 フォーラム「ねねね、ネオニコチノイドってなあに？」～「美味しんぼ」105巻を読んで、みんなで語ろう！～

日 時：6月9日（土） 13:30～17:30

登壇者：雁屋哲氏（『美味しんぼ』原作者）

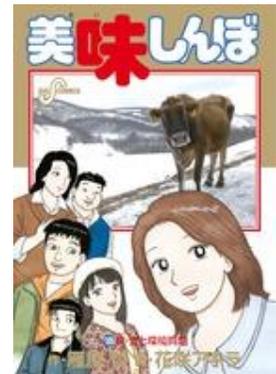
田中優氏（環境問題活動家）

土井彩氏、野下晃子氏、レイ彩氏（子育てママ）

- ・ 追加企画 ワークショップ「マイ・プロジェクトをカタチにしよう」

日 時：8月18日（土） 13:00～17:00

ファシリテーター：鈴木菜央氏（greenz.jp 発行人）



II. 各回の内容

■ 第1回「ミツバチからのメッセージ」

広報文：ネオニコチノイド系農薬の特徴（神経毒、浸透性、残存性）により、標的とする“害虫”だけでなくミツバチをはじめ多くの昆虫や鳥に悪影響を及ぼしている養蜂被害の現場の声を聴きます。一方、ネオニコチノイドを使えないと困る農業生産現場の声を聴きます。異なる2つの現場から学び、参加者の皆さんとディスカッションしてより多面的に問題を捉えたいと思います。

日時：3月17日（土） 13：30～17：30

場所：新宿区歌舞伎町2-19-13 ASKビル4F会議室

登壇者：藤原誠太氏（養蜂家、ネオニコチノイド系農薬の使用中止を求めるNGOネットワーク代表）



創業明治34年の藤原養蜂場の3代目、日本在来種みつばちの会会長。人体にも環境にもほとんど無害ということで許可され、使用拡大が進むネオニコチノイド系農薬の使用を止めることは重大な責務と考え、ネオニコチノイド系農薬の使用中止を求めるNGOネットワークの代表を務める。

後藤和明氏（らでいっしゅぼーや株式会社・Radixの会）



らでいっしゅぼーや株式会社農産部長として、安全で環境にやさしい商品を選ぶという持続可能なライフスタイルを提案し続けている。その一方、らでいっしゅぼーや株式会社と取引を通じてつながる生産者・メーカー有志によって組織される非営利の任意団体Radixの会常任理事として環境保全型生産の普及に務める。

青木将幸氏（ファシリテーター）

◆藤原誠太さんのお話し

藤原さんからは、養蜂家の立場から現場の状況を伺うと同時に、より広い視点でもネオニコチノイド被害の現状をお話しいただいた。

『かつて広く使われていた有機リン系農薬の被害の実態が明らかになり、ここ10年の間でネオニコチノイド系農薬は害のない農薬として登場し、広まってきました。しかし毒性の強い有機リン系農薬は浸透性が低く一過性であることに対して、ネオニコチノイド系農薬は浸透性が高いため洗っても落ちにくい上、毒性が継続する場合もあることがわかってきました。

日本ではヨーロッパと比べると、作物によっては1,000倍のネオニコチノイド系農薬の使用が認められています。アメリカと比べても、日本は10倍ほどとなっています。

全世界の80%のアーモンドは、カリフォルニアで作られます。そのために、全米からトラックでハチが運ばれてきます。しかし、そのハチがいなくなっています。運んでくるストレスが理由だとか、病原菌が発生したのではないかとされていますが、養蜂家はネオニコチノイドのせいではないかと言っていました。

アメリカで農薬を世に出す際には、日本の環境省にあたるEPA（アメリカ合衆国環境保護庁／United States Environmental Protection Agency）によって管理されます。EPAで、2つ程の重要な実験が省かれていたために、ネオニコチノイドの被害が認められないということが暴露されました。その結果、アメリカの農務省のトップが、病気が原因でハチはいなくなっているけれども、その病気を引き起こしているのはネオニコチノイドの可能性が高いと発表。その後、バイエルという大きな化学メーカーが、カリフォルニアのアーモンド畑から撤退しました。

ヨーロッパでは、トウモロコシの害虫対策のために種にネオニコチノイド系農薬をまき、その種から成長した植物が成長しても虫を殺す例も問題とされています。

このように、ミツバチが巣に戻ってこないという養蜂家の立場からの害だけではなく、もっと広くこの問題を考えることが必要だと思っています。』

◆後藤和明さんのお話し

有機・低農薬野菜や無添加食材の宅配サービスを行う「らでいっしゅぼーや株式会社」の農産部の責任者である後藤さんからは、生産者と消費者の立場を両立させるため、どのようにネオニコチノイド問題に対処しているのか、その現状を発表していただいた。

『基本的に「らでいっしゅぼ一や」は農薬に反対の立場です。それは消費者の皆さんのことでもあります。生産者の体のことも考えなくてはいけないと思うからです。そのため生産者の方々と話し合っ、100種類以上の禁止農薬を定めています。

しかし、あまり規制を厳しくすると多くの生産者は農作物を作れなくなってしまいます。ネオニコチノイドについても、できるだけ減らす方向ですが、情報公開をしながら順を追った現実的な削減対応をしています。

また農薬を使わずに生産すると、どうしても虫に食われてしまい、それは消費者の皆さんから嫌がられます。以前、消費者アンケートで農産物の虫食いはどこまで許せるかを聞いたところ、1/8の虫食いで消費者は嫌がるという結果が出ました。

お米に関しては、等級制度があることもネオニコチノイドを使用する大きな理由です。カメムシの害に合うとお米に黒いものが出来て、それが1000粒に2粒以上あると2等米になってしまい、販売価格が大きく下がります。これを斑点米と言いますが、これを恐れて農家の方は農薬を撒いています。

また、農家の方は経営や後継者育成で手一杯であるために、ネオニコチノイドの問題について知らない方も多いようです。

今後、生産者の努力と消費者の理解の接点を探しながら、しかし消費者以上にむしろ農家の皆さんの体に悪い影響を与える農薬は、可能なかぎり減らす努力が必要だと考えています。』

◆参加者の主な感想

- 自身の健康はもちろんだが、それ以上に、みつばち、鳥、生態系の存在を無視した農薬は、本当に恐ろしく感じました。
- できるだけ、正確な情報をもとに議論を進めるべきだと感じた。そうでないと、最後には生産者や消費者、特に行政を動かすことはできない。
- 生物多様性認証作物など（みつばち健康米のようなもの）を進めていきたい。本物の農産物は健康であるべきだということと、日本人の潔癖性を少し正すべきだと感じた。
- 「環境負荷」と「食品の安全」という視点って意外と目指すものが重ならないのかもしれないと思いました。本来ならば一体化するはずのこの2つの問題をうまく繋げて行く想像力を、どうしたら消費者から引き出せるようになるのだろうと思いました。
- 単なる糾弾の場ではなく、農薬を使わざるを得ない農家の立場の話も聞くことができ良かった。どのようにして、この問題を広めることができるだろうかと考えた。また、養蜂

家が声を上げにくい現状が分かったのも良かった。

- ▶ ネオニコチノイドの問題は、ほとんど知らなかったが、食の問題、消費、生態系、グローバリズムなどが絡み合っていると思った。グループディスカッションでは、ご近所どうし、ちょっと話し合うというスタイルが新鮮で面白かった。
- ▶ 参加する前は、全くネオニコチノイドについて知らなかったのですが、最後のグループディスカッションでは、どうやって認知度を高めるか話し合っている。会の流れがとてもキレイで、勉強になりました。
- ▶ 他の方々と話していて、本当にとっても違うバックグラウンドの方もいれば、近い方もいて、意見を合わせるのは難しいですけど、そういう人たちと話せたのは良い経験になりました。
- ▶ 普段、考えようと思っても「何故？」と思ったことについて情報を集めることが上手く出来ませんが、こうやって対面で話すと「何故？」にも答えてくれる方がいたり、どんどん皆のアイデアが出て話が進んでいきます。会って話す事の大事さを、改めて感じました。

■ 第2回「子どもを守るための予防原則」

広報文：「人体には影響ない」といわれるネオニコチノイドの神経毒性が、人間とくに発達期の胎児や乳幼児に被害をもたらす可能性について研究の最前線から学び、子どもたちに向けた予防原則という視点でこの問題を考えます。

日 時：4月28日（土） 14：00～18：00

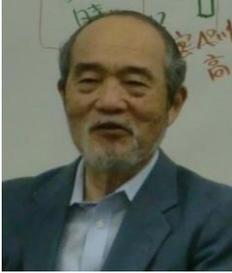
場 所：新宿区歌舞伎町2-19-13 ASKビル4F会議室

登壇者：大竹千代子氏（化学物質と予防原則の会代表）



国立医薬品食品衛生研究所勤務時の98年、「環境ホルモン調査」のためデンマーク・スウェーデンを訪れ、予防原則に出会う。当時、すでにプラスチックの可塑剤、洗浄剤の規制が予防原則に基づいて行われていた。2000年、EUで予防原則の法律が採択。これを日本へ紹介始める。2002年HP「化学物質と予防原則の会」を立ち上げる。同年、予防原則普及のため東京農工大学で博士号を取得し、研究所を退職。05年合同出版から『予防原則』出版。

黒田洋一郎氏 （元東京都神経科学総合研究所）



66年東京大学農学部農芸化学科卒業後、東京大学応用微生物学研究所（現・分子細胞生物学研究所）を経て、ロンドン大学精神医学研究所に留学。73年東京都神経科学総合研究所入所、のち参事研究員、03年客員研究員。医学博士。99-05年定年をまたいで、科学技術振興機構（CREST）の「環境化学物質と脳の発達障害」プロジェクトの研究代表者。2011年環境脳神経科学情報センター設立。

青木将幸氏 （ファシリテーター）

◆大竹千代子さんのお話し

大竹さんからは、ネオニコチノイドを予防原則の視点で考えるというテーマで、欧米における予防原則適用の指針と日本における現状をお話しいただいた。

『1992年リオデジャネイロで開かれた国連環境開発会議において、「環境と開発に関するリオ宣言」が採択され、日本もこれに批准しました。この第15原則は「予防的取組方法は、環境を保護するため、各国の能力に応じて広く適用されなければならない。深刻な、あるいは不可逆的な危害の脅威のある場合には完全な科学的確実性の欠如を理由に、環境悪化を防止するための費用対効果の大きな対策を延期してはならない」と記しています。

これはつまり、「因果関係が科学的に確実でない場合や、未だ結論に到達していない場合、脅威の解明はその時点において科学の限界と認め、さらなる時間を科学分析にのみ費やすことなく、必要があれば、社会的、行政的見地から早期に対策を講じるべきである」ということになります。私としては、「潜在的なリスク（脅威）が存在するというしかるべき理由があり、しかしまだ十分に科学的にその証拠や因果関係が提示されない段階であっても、そのリスクを評価して予防的に対策を探ること」を予防原則の定義としています。

具体的には、以下のようになります。

- ① 専門家による厳密な測定や調査が行われるまでもなく、人や自然環境・家畜・ペットなどの「リスクの兆し」があった場合（水俣病ほか）
- ② 労働者間で発生した有害物質による疾病や危害があった場合（アスベスト被害ほか）
- ③ 新種のリスクこそ、情報の不足と経験がないため、予防原則適用の対象候補となる（低

周波ほか)

欧州の環境保護は予防原則に基づいています。ヨーロッパでは環境も動物も人間も一緒に保護するという考え方が昔からあり、特にスウェーデンでは、化学物質に関する法律はかなり前からあって、環境のために自分たちが何かを行うことは誇りである、という風に考えています。

日本でも、2006年第三次環境基本計画の策定の際、「科学的知見は常に進化するものである一方、常に一定の不確実性を有することは否定できない。しかしながら不確実性を有することを理由として対策をとらない場合に、問題が発生した段階で生じるコストが非常に大きくなる問題や、地球温暖化問題のように一度生ずると取り返しがつかず、将来世代に及ぶ影響をもたらす可能性がある問題についても取り組みが求められている。そのため、必要に応じてどの程度の不確実性があるのかも含めてそれぞれに時点において得られる最大限の情報を基にした予防的方策を講じる必要がある。」としながらも、これは法律ではないので、規制力もなく、実行されたことを聞いたことがありません。

私が考える予防原則適用の指針は以下にあげる2点です。

- ① 予防原則の実施において、可能な限りの完全な科学的な評価から始めること。各段階において科学的な不確実性の程度を明らかにすること。
- ② 評価の結果、不確実性が残り、予防原則の手続きが開始されるときは、その方法の選択肢の決定には、すべての関係当事者（ステークホルダー）が参加し、その手続きは可能な限り透明であること。

今後、過去の公害が未然に防げなかった教訓を真摯に学び、「小さな兆し」の情報を社会が共有することが求められます。予防原則は、21世紀に必要な法制度です。いかなる分野でも潜在的风险「小さな兆し」を訴える市民があれば、ステークホルダーが一堂に会し、議論し、調査し、評価し、対策が手遅れにならないように、予防原則が適用できる仕組みを作る義務が、国と地方自治体にあります。』

◆黒田洋一郎さんのお話し

黒田さんからは、脳神経の専門家としての立場から、化学物質が人間の体に与える影響についてお話いただいた。

『これまでに、例えば以下のような社会問題が発生してきました。』

- ・1950年代からの、有機水銀による水俣病、妊婦の汚染による胎児性水俣病

- ・ 1970 年頃、米国自閉症、注意欠陥多動性障害（ADHD）など発達障害児増加
- ・ 1980 年頃、日本、PCB など化学物質公害後も農薬使用量増加
- ・ 1990 年頃からの、自閉症、注意欠陥多動性障害（ADHD）など発達障害児の増加

最近では、軽度発達障害の子どもが増えています。その症状は子どもによって以下のように様々です。

- ・ 学習障害（LD）：読み書き、算数だけ上手く出来ない
- ・ 注意欠陥多動性障害（ADHD）：注意力散漫で、落ち着きがなく動き回る
- ・ 高機能自閉症（アスペルガー症候群）：他人とのコミュニケーションが苦手
- ・ 文科省の調査で前学童の 6.3%（17 人に 1 人）が軽度発達障害ではないか（2002）
- ・ 脳の発達の途中で、ある神経回路だけが傷害され、特定の行動だけが上手く出来ない。他は正常

軽度発達障害は、個性との連続性があるため診断が困難な部分があります。昔は他の子どもと少し違っても、「個性がお強いようで」で済まされていたことが、今では済まされません。アメリカや日本の様に文明化された社会が、障害のもとにもなっているとも言われています。アメリカでも自閉症児が増えていて、環境化学物質が原因ではといわれ始めています。2010 年の朝日新聞には、有機リン農薬を低濃度でも摂取した子どもは ADHD になりやすいという記事も掲載されました。

なぜ農薬など環境化学物質で発達障害がおこるのかというと、心の働きは全てそれぞれに対応する脳内の神経回路で働き、その神経回路は化学物質（神経伝達物質）で働くからです。脳内で働く化学物質に似た環境化学物質（にせもの）が胎児、乳児の脳に入ると、神経回路に異常をきたし、異常の起こった神経回路の担う行動だけ、障害がおこります。

また、胎児・乳児の脳は発達中なので化学物質に弱く、血液脳関門も未発達なので脳内に入りやすいのです。水俣病では、お母さんが水銀を摂取して胎児が脳に重篤な障害がでました。このことによって、大人の脳と違って、赤ん坊の脳には毒性を遮る機能がないことが分かりました。

ネオニコチノイド系農薬は、発達障害の原因とされる有機リン農薬と置き換えられつつありますが、より直接に脳の発達を傷害する可能性が高いものです。もともと農薬の安全性試験は不十分で、脳の発達への安全性は全く確かめられていませんし、食品などからの内部被曝なので、摂取量が分かりにくく、傷害が起こっても因果関係が立証しにくいことも問題です。

農水省、農薬会社、農協の癒着で、安全性の問題点が隠蔽されやすい状況もあります。そし

て何よりも、農薬はもともと第二次世界大戦の神経毒ガスの“平和利用”という名のものに利用され始めたものです。

レイチェル・カーソンの「沈黙の春」にあるように、環境汚染は、まず自然界に作用し、それから人間に作用する。だから自然界の観察は必要です。実験して結果が出てくるまでには、10年程度かかります。そして結果が出てからでは手遅れになるでしょう。その前に予防原則で対応していくことが、今後重要だと思います。』

◆参加者の主な感想

- いろいろな分野でEUの基準が厳しく出来ているのはどうしてかと、かねてから思っていました。が、「科学は完全ではない、人間も生物も守っていききたい」という考え方が基になっていることを聞き、少し納得しました。
- 原子力発電も遺伝子組み換えも、人間の人が自然を超えられるという傲慢さから成る技術だと思っています。人は恐れをもって生きるべき、ということの大切さを改めて思いました。
- 現状を変えていくには、小さな行政の単位ぐらいから始めた方が現実的であり、農薬会社を相手にするよりも農家、生産者一人ずつと話していった方が良いというコメント、マスメディアを良い方向に育てるには、ダメな部分をたたくのではなく1%の良い部分を褒めて、それを伸ばしていく方法が良いなどのお話しが印象に残りました。
- 新しい市民の安全のための原則「予防原則」が勉強になりました。どう運動化、深化させてゆけるか考えたい、行動してゆかねばと思いました。
- ただ今妊娠中なので、ADHDなどのお話を聞くと増々心配になりました。いろんな人と話をするとすべての事柄にあてはまるのですね。
- ぜひ、農薬メーカー、農業生産者（慣行農法をやっている人）の話を聞く場を作って欲しいと思った。

■ 第3回「ネオニコ問題をナナメに切る」

広報文：ネオニコチノイドのような環境化学物質に頼らない農業と暮らしの姿を、政治とも市民運動とも違うソーシャルビジネスの切り口から考えます。生産者の生活と消費者を

ねねね、ネオニコチノイドってなあに？

—新農薬ネオニコチノイドについて“未来に向けたみんなの意見”づくり大公開—

つなぎ、より良い選択を社会の中で行っていくために流通や事業が果たす役割について学ぶ中から、私たちのできる行動について話し合いたいと思います。

日 時：5月12日（土）14：00～18：00

場 所：新宿区歌舞伎町2-19-13 ASKビル4F会議室

登壇者：鈴木菜央氏（greenz.jp 発行人）



1976年バンコク生まれ東京育ち。2002年より3年間「月刊ソトコト」にて編集。独立後2006年「あなたの暮らしと世界を変えるグッドアイデア」をテーマにしたWebマガジン「greenz.jp」創刊。2007年よりグッドアイデアな人々が集まるイベント「green drinks Tokyo」を主催。メディアとコミュニティを通して持続可能でわくわくする社会に変えていくことが目標。

高安和夫氏（銀座ミツバチプロジェクト理事長）



1965年千葉県養豚農家の長男として生まれる。大学卒業後、住宅会社勤務を経て、1999年農業生産法人（有）アグリクリエイイトへ入社。2003年取締役東京支社長就任、現在に至る。2006年より都市と自然環境の共生を目指し銀座の屋上で養蜂をスタート。ミツバチを通じて都市と農村を結ぶ活動を積極的に行っている。また、全国の森、里、街そして海をつなぐサステイナブルネットワークフェスタ、「ファームエイド銀座」を毎年開催している。

青木将幸氏（ファシリテーター）

◆鈴木菜央さんのお話し

鈴木さんからは、社会的な課題の解決と同時に新たな価値を創出する仕組みを、個人個人が創っていく「マイ・プロジェクト」が必要だという視点から、事例とその考え方を紹介いただいた。

『まず「マイ・プロジェクト」のいくつかの事例の紹介をいたします。』

あるフランスのデザイナーが、ネットでマフラーを注文できるサイトを作りました。どんな

マフラーが作れるかカスタマイズできて、それを編んでもらうお祖母ちゃんも選ぶことが出来る。サイトには、ローリングストーンズが好きだとか、猫を飼ってるだとか、お祖母ちゃん達のプロフィールがあり、購入者はそれを読んで一人を選びます。そして、直接お祖母ちゃんからセーターが送られます。もちろん、これはお祖母ちゃんのお小遣い稼ぎになりますし、それと同時にボケ防止にもなりました。そして、そのお祖母ちゃんを気に入ると文通することも出来る。もっと仲良くなると、家に遊びに行くかもしれない。このように血縁、地縁を超えた新しいコミュニティ作り、田舎と都市を繋げる活動にもなっています。

フォルクスワーゲンのスウェーデン支部では、新車発売キャンペーンを行うことにしました。この時に、楽しいという気持ちには人間の行動を変えるパワーがあるのではないかという仮説を実証するためのアイデアを募集しました。2500件ものアイデアが集まった中から採用されたのは、スピード違反した人からは罰金をもらい、制限スピードを守った人には罰金を元手にこれから当選発表をする宝くじを送るというものでした。

ニューヨークでは、ユニセフによって世界に10億人以上の人が安全な水にアクセスできないという現実を実感してもらおうというキャンペーンが行われました。それは、8種類の汚水が買える自動販売機の設置でした。汚水のボトルにはデング熱、腸チフス、マラリアなどと書いてあります。そして、「あなたはこの水を買うか買わないか選べますが、途上国の人には喉が渴いて目の前の水たまりの水を飲まざるをえない人がいます」というメッセージも書かれています。このキャンペーンは成功してメディアの取材が殺到しました。

日本でも、クリスマスにケーキ屋さんで、ホールケーキからワンピースだけ欠けたケーキを販売するという企画が行われました。そして、欠けたワンピースは寄付という形をとっていました。この企画も成功しています。

これらのように、ネオニコチノイド問題がみんなの「自分ごと」となるために必要なことは、社会的な課題の解決と同時に新たな価値を創出する画期的なしくみをつくる視点を持つことだと思います。それは自分ごとから始まる、お金もネットワークも「無い無い尽くし」の社会変革運動です。小さなマイ・プロジェクトを日々生み出し、お互いに応援して、マイ・プロジェクトの生態系を作っていくことが、市民一人一人のできる、これからの社会変革だと考えています。

問題を「解決しなければいけない対象」として捉えるのではなく、「素敵な活動を展開する場」と考える。ネオニコチノイド問題と向き合うと、「アンチ」という立場になりがちです。しかし、自分ごとから出発して、生活の中に素敵な活動を組み込んでいくことで世の中に伝わります。

このことが、私たち自身で問題を解決する一つの形だと思います。』

◆高安和夫さんのお話し

高安さんからは、「マイ・プロジェクト」の一つとして、銀座ミツバチプロジェクトの活動についてお話をしていただいた。

『銀座ミツバチプロジェクトは、銀座の屋上で野菜を育てられないか？というところからスタートしました。しかし、なかなか野菜を育てるのは難しかったところに藤原養蜂場の藤原さんと出会い、ミツバチを育てようということになりました。

初めは NPO 活動ではなく、大人の遊びでやろうと、気心しれた人たちを集めました。ミツバチの購入や柵の制作に 60 万円程度しましたが、ミツバチを飼うビルのオーナーと私とで半額ずつ出し合いました。そして事務所と事務局は私が受け持ちました。「銀座でミツバチを飼ったら面白くない？そこでハチミツが取れたら、バーに持って行ってカクテルにならないか？」と銀座食学塾と銀座の町研究会を中心にメンバーを募ったところ、約 15 人集まりました。メディア関係者に友人もいたことから、「銀座にミツバチが引っ越してきました」と初日からテレビの取材が入りました。

銀座は消費の中心地で環境とは無縁と思われていましたが、巣箱を置いてミツバチを飼うと、美味しいハチミツが取れました。それは、皇居・公園・街路樹等を人が守ってきたからです。田舎の環境は良さそうなイメージがありますが、ホテルは減っている、トンボもカエルもいない、化学物質過敏症患者も増えています。自然があったとしても、人が守っていかなければ良い環境にはならないと感じました。

それから1年ほど過ぎると、銀座は環境に優しい町になっていきました。4つの会社が初年度からスイーツ作りで協力してくれたこともありました。ミツバチが飛び、ハチミツが取れ、それがお菓子になって、お客さんも沢山きて、町も元気になる。銀座と町の環境がリンクしたんです。

その後、銀座でミツバチを飼うだけでは社会性が小さいと感じ、地方の皆さんと連携して地方の農業を応援する「ファームエイド銀座」という屋上農園を始めました。農薬反対とは言わずに、あなたの『おいしい！』が日本の地域と食を元気にします！というコンセプトをもとに「人と自然の共生」について、銀座からメッセージを発信しています。岡山県の新庄村で防虫

剤を使ってお米を作っていた農家さんに、お米を買うから防虫剤の使用をやめてほしいと頼みました。そのお話を銀座松屋さんにしたところ、銀座の老舗のおせんべい屋さんを紹介いただき、そちらで使っていただきました。活動に共感してもらえれば、松屋さんにも応援してもらえるんです。

農薬の問題を語ると、JAに言って農薬の使用を控えてもらおう、農家の方に不使用をお願いしよう、自治体に訴えようと思うかもしれませんが、それは厳しい。JAは農薬を売る事で儲けている、カメムシ対策の農薬散布は市町村で農業振興の予算を組んでやっている、そしてネオニコチノイドは大手の化学メーカーが作っていて、JAは多くの政治家の票田にもなっています。

そういうところに訴えても社会は変わりません。「やっぱりネオニコチノイドを使ったお米は良くないよね」と消費者がスーパーなど直接お米を買っているところに訴える。お店は消費者の声を聞きますから、消費者の行動によって仕組みは変えられると思っています。』

◆参加者の主な感想

- 楽しく一人一人が「自分ごと」として活動できるどのような社会が出来るというのを知ることができて良かったです。「有機的につながっている ⇒ 生態学的」という表現は、まさにこれだ！と思いました。
- 社会への情報発信の仕方と、実際に一つのプロジェクトを成功された方の組み合わせが良かったと思いました。東京はコンクリートジャングルで、自然などどこにあるのか？と思えるほど、自然から切り離されているという気がしていましたが、東京が里山になったら、なんて良いことなのだろうと思いました。
- こういうどうにかしなきゃ、といったフォーラムでは、今回の様な情報発信方法の内容は珍しいと思います。楽しかったし、勉強になりました。
- 誰もが始められる活動が、とても希望のある未来を作るきっかけになる。もっと肩の力を抜いて、発信することから始めたいと思いました。
- 社会的メディアの共有プラットフォームのコンセプトに徹する方針は、とても納得できました。
- 銀座プロジェクトは銀座を十分に耕す（社会的な耕作者！）ことを目的に、個人とそのネットワークから始まった展開が良いと感じました。

■ 第4回 フォーラム「ねねね、ネオニコチノイドってなあに？」 ～「美味しんぼ」105巻を読んで、みんなで語ろう！～

広報文：この連続企画のきっかけとなったのは、人気マンガ『美味しんぼ』の105巻です。食と環境問題の関連を描くなかで、ネオニコチノイド系農薬について、わかりやすく、詳しく描かれています。フォーラムには『美味しんぼ』の原作者・雁屋哲さん、環境問題に精通する田中優さんにご登壇いただき、「お母さんたち」や、ご来場のみなさんとの質疑応答・意見交換の時間も設けます。「お母さんたち」は、小さなお子さんを持つ御三方。これまで3ヵ月に渡ってネオニコチノイドについて学んできました。田中優さんには、鋭いトークでこの問題の「肝」をお話し頂きます。

日 時：6月9日（土） 13：30～17：30

場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際会議室

登壇者：雁屋哲氏（『美味しんぼ』原作者）

1941年、中国・北京生まれ。東京大学教養学部卒業後、電通勤務を経て漫画原作者となり、『男組』（画/池上遼一）『野望の王国』（画/由起賢二）などを手がける。83年、『美味しんぼ』（画/花咲アキラ）の連載開始。87年、同作品で第32回小学館漫画賞受賞。

田中優氏（環境問題活動家）

地域での脱原発やリサイクルの運動を出発点に、環境、経済、平和などの、さまざまなNGO活動に関わる。現在「未来バンク事業組合」「天然住宅バンク」理事長、「日本国際ボランティアセンター」「足温ネット」理事、「apbank」監事、「一般社団法人天然住宅」共同代表を務める。

土井彩氏、野下晃子氏、レイ彩氏（子育てママ）

現在、子育て中の皆さま。これまでの3回の企画に参加し、次の世代を育てている普通の母親の感覚で、ネオニコチノイド問題を考えてきた。

青木将幸氏（ファシリテーター）

◆田中優さんのお話し

田中さんからは、ネオニコチノイド問題の仔細についてお話しいただいた。

『日本は世界一の単位面積あたりの農薬使用量です。日本人の生真面目さゆえか、農薬はきっちり使わなければいけないと思っているようです。その反面で、途上国は農薬が高いためにたくさんは使えません。日本の農薬の基準は EU 基準と比較すると、ブドウにいたっては 500 倍。この値は、ヨーロッパでは 1 年半かかって使用する量を 1 日で使うことになるほど甘い基準です。農協は、このように農薬を売ることで儲けるという仕組みになっています。

政府のデータを見てみると、野菜の残留農薬検査の結果は「調査なし、調査なし、調査なし」とあるように、ほとんど調査していない。これは非常に実態が知れない状況です。

種苗会社は、種の時点でネオニコチノイドの溶液につけて、虫が寄ってこない種をつくります。その種を植えて、芽が出て、花が咲くとその花からもネオニコチノイドが検出されます。有機リン系農薬は、特有の臭いがしたので虫も逃げていました。しかし、ネオニコチノイドは無味無臭無色なので、ハチですらわかりません。ネオニコチノイド系農薬は水溶性農薬であるが故に厄介です。松食い虫対策で、ネオニコチノイドが最上流の山でヘリコプターで散布されます。そうすると、下流でもネオニコチノイドが検出されます。

日本ミツバチは体温が高く 38 度くらいです、体温を冷やすために水を集めて共有する習性をもっています。ネオニコチノイドは水溶性の農薬ですから、その水に入っていることがあります。最近濃度が薄くなっているのですが、すぐには死なず、脳が機能しなくなります。あるタイプの虫は集団で一つの生き物という仕組みになっていて、その統率が一番取れているのがミツバチです。その統率が取れなくなるので、ミツバチが巣に戻れないという本来ならあり得ないことが起こっています。

虫は、アセチルコリンという物質で神経伝達し、人間はグルタミン酸とで神経伝達をされると言われてきました。そのために、ネオニコチノイドを使用しても人間には影響が出ないという理屈だったのです。しかし、人間もかつては今程複雑な体ではなく、その名残が脳の奥にもあります。最近の研究で、脳の中の海馬の扁桃核、脳の一番原始的な部分にアセチルコリンの受容体が見つかりました。

虫も人もアセチルコリンという物質を持っていて、それが受容体と結合すると神経細胞に信号が送られます。しかし、ネオニコチノイドは受容体に結合して、アセチルコリンがないのに神経伝達をおこして異常興奮を起こすニセ神経伝達物質なのです。また、ネオニコチノイドが分解していく過程でシアンという猛毒がでます。扁桃核は、意識・情動・自律神経を、リンパ球は免疫を、海馬は記憶を司っている所以他们らに影響がでる可能性があります。

こんな事例があります。3 歳の男の子がブドウ狩りに行き、翌日ブドウジュースを作って飲

ねねね、ネオニコチノイドってなあに？

—新農薬ネオニコチノイドについて“未来に向けたみんなの意見”づくり大公開—

んだ。先ほども言ったように、ブドウは特にネオニコチノイド汚染が酷いのです。そのジュースを飲んだ男の子は失禁、腹痛を起こし動かなくなりました。3日後には、ADHDの症状も出てしまいました。その後、汚染されたものを食べないようにしたところ、5日後に普通の状態に戻りました。

ネオニコチノイドは果物、お茶、野菜、お米の順に多く使われています。また家の中でも、殺虫剤や蚊取り線香などで沢山の農薬を使用しています。一方、小学校のうち80%くらいでADHD対策のため補助職員をクラスに配置しているという現実もあります。

では、ネオニコチノイドを体外に排出する方法はないのか？食物繊維がキレート効果（有害物質を結合し体外に排出する働き）で、デトックス（解毒）するということが分かってきました。しかし、1950年のニンジンと比べると2005年のニンジンでは10%くらいしか栄養価がありません。健康のためにかつては1kg取れば良かったものが、同じ効果を期待すると現在では10kg取らなければなりません。

きちんと土作りして作った野菜は、今でも昔と同じくらいの栄養価があります。その野菜は、本来は10倍の値段で買ってもよいのではと思います。そのような野菜を消費者が買い求めるような社会にすれば、農家の方もネオニコチノイドを使わなくなるのではないのでしょうか』



◆雁屋哲さんのお話し

雁屋さんからは、「美味しんぼ」の取材に同行された安井洋子さんとともに、現在の食の問題に対する問題提起をいただいた。

『私は、大学時代にレイチェル・カーソンの「沈黙の春」を読み、これはとんでもないことだと思いました。日本でもしばらくして有吉佐和子の「複合汚染」がでて、話題にもなりました。日本人はそのときは話題になるが、すぐに忘れて便利な方に流れる傾向があります。

ねねね、ネオニコチノイドってなあに？

—新農薬ネオニコチノイドについて“未来に向けたみんなの意見”づくり大公開—

ネオニコチノイド問題は、消費者の皆さんの問題です。消費者がパチンコや娯楽などにお金はつかい、大事な食べ物には使わないために起こるのです。農薬を使ったお米と、無農薬で農業をしている須藤さんのところのお米、それぞれ 5kg で 2500 円と 5000 円です。お茶碗一杯に換算すると 10 円か 20 円しか変わらない。それでも、消費者は安い方を買うんです。果物もそうです、消費者が形や色が綺麗な方がいいというから、農家の方は農薬を使うんです。

また、今日では化学調味料を使っていない食べ物はほとんどありません。京都の漬物屋も、化学調味料を使わなくなった途端に味が落ちたといわれたそうです。化学調味料に毒されて何が本物の味かが分からなくなっているんです。

ある農協でお話を聞いたときには、「農薬は体に良い」とまで言っていました。なぜかと聞くと、「戦後これだけ寿命が延びたのは、農薬が体にいいからだ」と言っていました。信じられないことです。

環境破壊が悪い、農薬を売る農協が悪いといいますが、消費者意識が低いためにそういったことを招いているんだと私は思います。消費者が、農薬を使っていない良い野菜は高くても買うというように行動すれば、農家も農薬を使わないようになると考えています。』



◆子育てママの発表

当初は特にネオニコチノイド問題に高い関心のあったわけではない3人の子育てママさん達から、これまでの企画を通じて何を感じ、どう考えたのか発表していただいた。

『毎日の子どもの食事を担っていますが、ネオニコチノイドについて全く知りませんでした。そして、自分がいかに色々なことに興味を持っていなかったかとショックを受けました。ネオニコチノイドは害虫に限らず、ミツバチにも作用します。ミツバチがいなくなると、ミツバチによって受粉する作物は実らなくなります。また、他の昆虫にも作用するという事は、生態

系のピラミッドの基盤が揺らぐ事でもあり、鳥や動物がいなくなるだけではなく、さらに大きな影響が考えられます。

そして、ネオニコチノイドは人体には影響はないと言われてきましたが、最近の研究では否定されてきていて軽度発達障害や心の病の一因とも言われています。心の病に化学物質が影響していることも私たちは知らず、驚きました。

食べる前に野菜をよく洗えば、農薬は落ちるんじゃないかと思っていたのですが、ネオニコチノイドはなんと洗っても落ちない。また、日本は世界一の農薬使用量。農薬の規制が世界と比べても緩いと聞いて、いったい誰のための規制なのかと思いました。一方で、連続企画の中では農薬を使用している生産者の方の現状をうかがう機会もありました。

生産者の方も農薬を使用すると体に不調をきたし、良い事ばかりではないということも知る事ができました。しかし、消費者が虫食い野菜を嫌い、旬を気にしないことが生産者の方に農薬を使わせているという一面も見えてきました。

ネオニコチノイドの危険性が伝えられてきている現在でも、変わらず使われ続けている理由には、農協や農薬会社の農薬を売りたいという事情があるからではないかと言われています。

ネオニコチノイドは農薬以外にも、身近で使われていることも知りました。食べ物からだけでなく、ペットの蚤取りや蚊取り線香などから、触って、吸い込んでいるかもしれません。

第2回で、大竹先生から予防原則を学びました。予防原則とは「潜在的なリスク（脅威）が存在するというしかるべき理由があり、しかしまだ十分に科学的にその証拠や因果関係が提示されない段階であっても、そのリスクを評価して予防的に対策を探ること」。日本では、環境省が第三次環境基本計画で指標として出しています。しかし、この予防原則が適用されたことはないそうです。EU ではネオニコチノイドに予防原則が適用されています。この違いは何なのでしょう？

子どもを育てていて、成長するためには食べ物が大事なんだという思いから、毎日の食べ物を選ぶ時には無農薬や減農薬のものを選んでいきます。しかし、どこでどんな農薬を使って作られているのかという情報までは知りませんでしたし、求めてもいませんでした。また、それを選ぶための情報もないんだと気づかされました。都会での暮らしの中では、生産と流通などに関わる現場を思いやるのが難しかったと感じます。情報は主体的に取りにいかないと、なかなか得られないことを実感しました。

これまでの日本は経済成長一辺倒で、豊かになることを目標に歩んで来ましたが、私たちはその恩恵に浴びてきて、経済成長を支えてきた方々には感謝しています。しかしその一方で、

環境への影響が取りざたされるたびに、「ただちに影響はない」、「これが原因とはいきれない」など経済的理由が優先されてきたことを、公害などの歴史的な事実から私たちは学ぶことができます。経済成長のみを追い求めて来た価値観が、いま転換点にあるのだらうと思います。

私たちが今暮らす社会は複雑で、原因と結果が一对一という分かりやすい関係にはありません。存在する全ての物がそれぞれ影響しあっていて、それは自然についても社会についても同じだと思います。EU では予防原則の適用についての共通理解があるようですが、日本にはまだありません。日本は、環境への影響と経済への影響と意見が対立したときに、その解決に向けた議論の場もなければ、話し合いのルールも決まっていない状況にあるように思います。

公害で被害に合われた方々は、健康や生活環境をないがしろにされたとの思いをいただいているに違いないと思います。これは、社会のあらゆる場面と言えることだと思いました。EU との違いはなんだろうと考えたときに、ある回でこれは民主主義が根付いているかの差なんじゃないかという意見がありました。確かに、私たちは自分のことは自分で決めるということがとても難しい社会に生きています。自分たちのことは自分たちで決めるという、暮らしの主権を私たちの手に取り戻したいと思いました。

そんな中、私たちが自分で出来るマイ・プロジェクトを考えました。

- 店頭で商品を選ぶときには成分表をみてから購入したい
- 安心や安全に対して常にアンテナを張りつつ、情報は鵜呑みにしない
- ママ友だけでなく、自治体の情報にもネットワークをはる。
- 予防原則に基づいて考え、それを価値観の合う人と共有する
- 子どもとの生活の中で食べ物について、環境について伝えていく
- 課外授業に養蜂家の方を呼んでみる
- 無農薬野菜の感想などをブログにアップする
- ラジオなどへ投稿するときに、ラジオネームを「ネオニコフリー」にしてみる

これからは、「肩の力を抜いて、ちょっと背伸びをして楽しくできる」をポイントに毎日を暮らしていけたらいいなと思っています。』



◆参加者の主な感想

- 市民一人一人が意識改革、行動に移すことを大切にしていかなければいけないと強く考えさせられました。また、いろいろな方面で活躍されている方々にお会いでき、お話しする機会を得られました。貴重な時間をありがとうございました。
- 自分の認識不足に気づかされました。情報を鵜呑みにせず自分の眼で、体で感じ確認することが大事だと思いました。グループワークで生産者の方に直接お会いできた事、真実の話を直接お聞きできました事、大変有り難く思いました。
- 「反対活動家」にならなくても日常の中でちょっとしたアクションをつみ重ねることで意識を高くもっていこうという言葉に心をうたれました。
- 子育てママたちの意見を聞きながら、難しいことも自然に自分の中に着地して吸収された気がします。

■ 追加企画 ワークショップ「マイ・プロジェクトをカタチにしよう」

広報文：大げさでない「じぶんごと」として日々続けていける活動「マイ・プロジェクト」をカタチにして、持ち帰ろう！ 3月～6月にかけての4回シリーズでネオニコチノイドについて様々な視点から一緒に考えてきました。前回の6月9日でシリーズは終了しましたが、そこで考えたことをカタチにしたいという思いから、新たにワークショップを企画しました。皆様ぜひ、一緒に考え話し合いマイ・プロジェクトをカタチにしましょう！

日 時：8月18日（土）13:00～17:00

場 所：東京都港区芝浦3-15-4 シバウラハウス3F

ファシリテーター：鈴木菜央氏（greenz.jp 発行人）

全4回終了後のフォローアップ企画として、2か月後にワークショップを行った。参加人数は9人と少なかったが、個々人がマイ・プロジェクトを考えることで、一人一人の中で今後の行動につながる内容になったと思われる。

Ⅲ. 成果と分析

■ 各回の成果と分析

* 第1回「ミツバチからのメッセージ」

第1回は、普通の市民が「何が起きているのかを知る」ことを目的に、ネオニコチノイド問題では一般的に最も知られている「ミツバチ」をテーマに開催した。基本的な情報を複眼的な視点で得るため、まず藤原氏に実際に何が起きているのか生産現場からのお話を、次に後藤氏に流通業の立場から生産者と消費者を同時に見据えたお話を、それぞれ伺った。

企画の最初で、実際に様々な理由でネオニコチノイドを使わざるを得ない生産者の現状のお話と、養蜂家という限定された業だけではない大きな視点から見た環境汚染としてのネオニコチノイド問題のお話を伺えたことは重要だった。

同時に、流通の立場でネオニコチノイドを考えた場合、人体への影響という一般の方が最も気にかかる部分では、消費者以上に生産現場のコミュニティや環境への被害が大きいという視点を提供いただいたことで、普通の都市住民である参加者の皆さんに、「一般消費者の社会的責任」が意識されたと思われる。

* 第2回「子どもを守るための予防原則」

第2回は、「科学的な事実を知ると同時に、社会的な問題を科学的な知識をもとにして回避する予防原則という考え方を知る」ことを目的に開催した。ネオニコチノイド問題は、化学物質による公害問題の一種である。そのため、脳科学の専門家である黒田氏から最新の科学的事実をお話しいただき、同時に環境問題における世界での新しいルールになりつつある予防原則によるネオニコチノイド問題への対応の可能性について大竹氏にお話しいただいた。

化学物質が原因で起こる社会問題を考える際には、科学的事実を知ることが基本となる。しかし、そのことは専門知識が必要になることもあって、一般の市民になじみやすいとは言えない。黒田さんのお話は、30分という非常に短時間だったが、必要以上に専門的になることなく、最終的に「科学ですべてを事前に把握することはできず、環境汚染などは被害が大きくなってからの対応では遅すぎる」というご意見だったことは、普通に生活する市民と科学者とのギャップを埋める内容だったのではないかと思われる。

今回の連続企画のもう一つのテーマは、「予防原則」だと考えている。ネオニコチノイドのよ

うな化学物質による環境汚染・公害問題が拡大しないための社会的な方法として、日本社会に予防原則を導入することが一つの解決策と成り得ることは、大竹氏、黒田氏がともにコメントしていた通りであろう。

* 第3回「ネオニコ問題をナナメに切る」

第1回で生産者と流通業者の現場について、第2回で科学的事実と社会的な解決方法について伺ってきたが、それだけでは単なる知識の取得にしか過ぎない。この連続企画では、都市部で普通に生活する市民がネオニコチノイド問題を広い視点から「自分のこと」として考え、次のステップへ進むことを目的としている。そのため、第3回は「ネオニコチノイド問題の個人への落とし込み」をテーマに開催し、鈴木氏にネオニコチノイド問題を「マイ・プロジェクト化」するための考え方を、高安氏に実際に成功したマイ・プロジェクトとしての「銀座ミツバチプロジェクト」についてお話をいただいた。

個人的な落とし込み作業であるため、参加者がどのようなことを考え、持ち帰ったかが重要なポイントとなる。連続企画で個人のアクティブな部分の喚起を目指すことは、この種の企画では珍しく、オリジナリティが高いと思われる。

当日のアイデアを行動に移すことができるかが次のステップとなる。これは個人の意思による部分が大きく、後のフォローアップの仕掛けがないと継続的な確認は困難だということが課題として残っている。

* 第4回 フォーラム「ねねね、ネオニコチノイドってなあに？」

～「美味しんぼ」105巻を読んで、みんなで語ろう！～

第4回は、この連続企画を内輪で終わらせるのではなく広く社会に問題提起することを目的とし、人気マンガ『美味しんぼ 105巻』を下敷きに、国立オリンピック記念青少年総合センター 国際会議室を使った規模の大きなフォーラムとして開催した。

田中氏と雁屋氏は、社会発信力があり、ネオニコチノイド問題に対して大きな危機感を持っている。お二人に共通する意見として、「消費行動」が解決の一つの手段だという部分があった。これは、無理のない範囲での個人行動がこれまで以上に社会を変える力になるというもので、後半のお母さんたちの意見とも同調するものだったと思われる。

田中氏と雁屋氏をお迎えしたことで、ネオニコチノイドという一般的ではないテーマであったにも関わらず 100人以上の集客ができたことは評価できる。一方で、「美味しんぼ」の購読

者に対して情報提供ができたかという部分では、そのノウハウがなかったために不十分だった。

二人の著名人とともに、「3人の子育てママさん」が登壇したことは、この企画の集大成としての意味合いがあった。ほとんどネオニコチノイド問題の知識がない状態で企画に参加し、3回を経てどのような地点に達するかということは、運営者側が意見誘導を一切しない進め方の中では予測不可能だったが、普通の感覚の中から極めてレベルの高い意見が出てきたことは、この企画の最も成功した点の一つだったと考えられる。

* 追加企画 ワークショップ「マイ・プロジェクトをカタチにしよう」

第3回と第4回を個人の継続した行動に移していくことを目的に、企画関係者で話し合いの結果、当初予定になかったワークショップを開催した。この企画は、最初の日程調整では集客がうまくいかず8月に開催した。集客と広報はこれまでの参加者を中心に行い、学習会ではなくワークショップということで、運動的な主体性を持った参加者を募った。当日参加は9名と多くはなかったが、鈴木氏のファシリテートのもと、充実したアイデアが出てきたと思われる。ただし継続性という部分では、その後のフォローがここでも課題となっている。

■ 全体を通した成果と分析

* 企画目的に対して

「ネオニコチノイド」という社会一般には広く知られていない問題を、専門家ではなく普通の市民に広げる目的については、ある程度成功したと考えられる。参加者のアンケート等を見た範囲では、参加者がこの問題に対する関心を持ったと同時に、生活の中で意識的に行動するようになったという意見が多数あった。

しかし、「広く」という部分では告知が限定的だったことなどの課題を残した。このことは、意見を集約するための facebook の活用が不十分だったことが大きい。今回の企画では告知を主に facebook を利用して行っていたが、普通の市民代表である「子育てママ」や、各回の参加者が facebook に対して不慣れであったことなど、企画参加者の属性と IT の活用のミスマッチがあったことが課題を残した原因であると考えられる。

最終回後に、何らかの「市民意見」の形成を行う目的については、漠然とした傾向に留まってしまう、意見形成に成功したとは言い難い。abt、ASJ、まちぼつとが「市民意見」を形成す

る主体ではないため、子育てママを中心に参加者の中から出てきた意見を集約することを考えたが、「マイ・プロジェクト」の推進という個による行動指針の形成と、マスを意識した幅広い「市民意見」とを両立させるには、もう一つ別の仕掛けが必要なのではないかと考えられる。

***企画の手法に対して**

一般的に考えれば、消費者側にいる市民のほとんどが反対するであろうネオニコチノイド問題に対して、「反対ありき」を前提とするのではなく、複数の立場の現状と事実関係を知った上で参加者が自分自身の意見を持つことを意識した進行方法は、「子育てママ」の最終的な発表のレベルから見て適切だったと考えられる。

また登壇者からの説明を短くし、登壇者を含む参加者間でのディスカッションの時間を長くとしたアドボカシーカフェの手法についても、ネオニコチノイド問題を客観視した上で、自分自身の意見を持つという今回の企画内容に合ったものだったと思われる。

企画全体の連続性と議論の質を保つことを目的に、追加企画を除いて青木将幸氏にファシリテーターを依頼したことは、レベルを高く維持するという部分で大変に重要だった。この企画は質的には成功だったと考えているが、その理由は、子育てママたちの人選、登壇者の人選と組み合わせ、ファシリテーターの力量によると考えられる。

■ 終わりに

今回の企画は主に東京に居住する消費者を対象に、一般的な感覚でネオニコチノイド問題を考える場を提供することで個々人のその後の行動が社会性を帯びたものになること、そして次の社会運動のきっかけになるような「市民意見」が形成されることを目指した。

その基本にある考え方は、例えばこれまで原子力発電所が政治セクターと企業セクターの意向のみによって推進され、事故後に市民による問題提起が盛んになされているにもかかわらず、反映の方法が見いだせない現代社会への問題提起がある。問題の本質はネオニコチノイド問題についても同様であり、今回の企画では市民のこれからの社会参加、社会変革のあり方を考えてきたということもできるだろう。

個人から発する問題提起をどう実社会に反映するかという点で、ネオニコチノイド問題を解決するために市民のできる活動には、いくつかのアプローチが考えられる。

一つは、科学的事実に基づいた予防原則の導入のように、行政側にアプローチする手法である。具体的には、議員に対するロビー活動やアドボカシー活動となる。それを行うためには、様々な分野の科学者、生産者、消費者、そして被害者など、複数の立場の人々が連携していくことが必要になる。

このような社会運動的なアプローチは、科学的に裏打ちされた事実、企業活動、一般大衆の意見などの間でバランスを取っていく政治的な視点と行動計画を持つ必要があり、そのためには中長期的に責任を持って推進する事務局体制と、それを維持する資金的な確保が重要になってくる。

次に、経済活動を通じてネオニコチノイドをなくしていく手法もある。らでいっしゅぼーや株式会社や生活協同組合などでは、減農薬という方向で生産者と消費者を結び付けることによって、ネオニコチノイドの減少を少しずつ着実にやっている。食に意識的な主婦層の多くは、このような共同購入の仕組みを活用している。

また、ネオニコチノイド等を使用していない有機農家から、個人が直接野菜などを購入する宅配の仕組みを意識して増やしていくことも、安心な農産物を手に入れるということに留まらず、志ある生産者を守り、農協主体の仕組みを変えていくという意味で重要な取り組みである。

メディアやITを活用することで世論を喚起する手法も考えられる。「美味しんぼ」のように大きな影響力を持つマンガへの掲載、「銀座ミツバチプロジェクト」のような先駆的な取り組みのメディアによる紹介、ネオニコチノイド問題を告発するホームページやツイッターの存在などは、ITを日常的に活用する若い層などに向けてこの問題を広げるために有効な手段である。

個人の小さなレベルであっても、facebookやツイッターで折に触れネオニコチノイド問題についてコメントしていくことは、何らかの切っ掛けで大きな世論を喚起したり、アドボカシー活動を成功させるための一つの力になってくると思われる。ただし、メディアの活用については、それを日常的に使用している層とアプローチをしたい層が一致していることを事前に確認しておくことが、今回の取り組みを見ても必要である。

そして、今回の企画のように実際に討議する場を提供することも、ネオニコチノイド問題の解決に向けるには重要な手法となる。普通の市民/消費者に正確な情報をどう伝え、そしてどう

行動を促していくのか考えた際には、必要な情報と討議の場を提供して意見を深めていくことが、手間はかかるが有効な手段だと考えられる。

また会場だけで完結するのではなく、ネット中継やそれをHPでアーカイブ化していくことは、クローズドになりがちな専門的な社会課題を一般化していくために有効である。次のステップとしては、ネオニコチノイド問題に関するデータや情報を、一般の消費者から専門家まで幅広い範囲で網羅したプラットフォームとしてのHPが望まれる。

前述したように、政治セクターと企業セクターによって社会が経済優先で推進されてきた結果、一般消費者、現場の生産者/従業者、自然環境、それぞれの現場に多大な負荷がかかっている。その負荷を減少する方法として、既存の社会システムの変更に手を付けることは大きなリスクだと考える政治セクターや企業セクターと、リスクはあってもシステムの変更によってのみ次の希望ある社会を創ることができると思うNPOセクターとの社会的なせめぎ合いは、未来を形作るための動きとして、様々な分野で現在以上に必要になると考えている。

ネオニコチノイド問題は、単なる新しい農薬問題ではなく、そのような大きな社会の動きの一つとして考えなければならない。この問題を解決するには、鈴木氏が「有機的につながるマイ・プロジェクト」でお話しされたように、個人の問題意識から発した多様なアプローチを、それぞれの場所でそれぞれが意識的に結び付けていくことが必要である。

今回のネオニコチノイド企画が、農業そのものにとらえ直しや、社会リスク回避の合意形成の新しい仕組み作り、政治・企業・NPOセクターの関係性の新しいあり方、高度成長を遂げた後の人間のライフスタイルのあり方などを含めたものとして、参加者それぞれの中で発展していくことを期待している。

以上